

高校不登校生徒の自立支援に関する試論

—— 通信制高校から大学進学を果たした生徒に注目して ——

博士後期課程修了生 長谷川 誠

抄 録

本稿は、高校不登校生徒の自立支援の方策として、通信制高校への転入がもたらす効果と役割について検討することを目的とした。とりわけ、友人関係や進路問題に悩み、不登校を経験したものの、通信制高校に転入し大学進学を果たした生徒に注目している。

分析、検討の結果、不登校経験者が将来的に多くのリスクを抱える高校中退を回避するために通信制高校に転入することは、自立支援の有効な方策のひとつであることがあらためて確認できた。その理由に通信制高校には自分のペースで学習に取り組み、職業体験学習への参加を通して主体的な進路決定をする環境があることや、クラス単位での学習スタイルでないことによって、日常的に固定化したグループに属さなくてもよい居心地の良さがあることが明らかとなった。また、不登校経験者の大学教育への「適応」について考える際には、「学びの適応」と「対人関係の適応」といったような、きめ細かな分析と検討が必要であることが示唆された。

Key Words : 不登校 自立支援 通信制高校 大学進学

1. はじめに

不登校問題に対する社会的な関心は高まる一方である⁽¹⁾。不登校の定義について文部科学省は「何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にある（ただし、病気や経済的な理由によるものを除く）こと」としている⁽²⁾。また占部真一（2014）は、「不登校は当初、欧米に倣って「学校恐怖症」と呼ばれ、その後、人数の増加とともに「登校拒否」と呼ばれるようになった」。そして1990年代に入るとさらに増加したことをうけて、「文部科学省は1992年、「登校拒否」を「不登校」

と変え「不登校問題は特別なケースではなく誰もが不登校に至ることがありえる」ととらえ方自体を変化させたのである」とし⁽³⁾、この20年間ほどで不登校の捉え方が変化する様子について述べている。

高等学校における不登校生徒数の推移をみると、近年では、55,000名前後、高校生全体の1.6～1.7%で推移をしているのが現状である⁽⁴⁾。また、高校生の不登校問題について斎藤剛史（2009）は「高校は小・中学校と違って義務教育ではないため、不登校は自動的に出席日数不足の扱いとなり、留年や退学（自主退学を含む）の問題としてとらえられていた」ことを背景に、学校教育現場においても、小・中学校ほど問題

視してこなかった点を指摘し、さらに「高校の不登校は、放置すれば中退につながるため、将来の進路に大きな影響を及ぼす」と述べている⁽⁵⁾。また、文部科学省は「不登校解決の最終目標は社会的自立」であり、不登校問題を「心の問題」としてだけでなく「進路の問題」として捉えることが大切であるとしている。つまり、不登校生徒が学校における学びの意味を喪失し、高校を中退するなど学校教育から離れてしまうことは、その後の進路選択に多大な影響を与えることとなるのである。

この高校中退者については不登校とあわせて深刻な問題となっている。文部科学省によると、2013年度の高等学校中途退学者数は約6万人、高校生全体に占める割合は2.0%であったことがわかっている⁽⁶⁾。この数値は、2008年度の約6万6千人（同2.0%）、2003年度の約8万人（同2.2%）と比べると減少傾向ではあるが、その様相は変わりつつあるとの指摘がなされている。このことについて文部科学省は「かつては「学業不振」「家庭の事情」で中途退学するケースが多かったが、近年では、学校生活や学業に対する不適応から中途退学するケースが増えている」と述べている⁽⁷⁾。

このように高等学校における不登校生徒の自立支援を考えるときには、不登校のみならず中途退学問題も重要な視点となる。そして、こうした不登校から中途退学者の受け入れや中途退学を回避するための転入先のひとつとして「通信制高校」がある。文部科学省においても通信制高校については「生徒の多様化が進む中では、定時制・通信制の高等学校が、従来からの勤労青年のための後期中等教育機関としての役割に止まらず、多様な学びのニーズへの受け皿として、その役割を増している。自分の興味・関心等に応じ、自分のペースで学べる定時制・通信制の教育は、不登校・中途退学経験者等への学び直しの機会の提供など、困難を抱える生徒の

自立支援等の面で大きく期待されるようになっている」と指摘している⁽⁸⁾。実際に、学校設置会社連盟（2008）の調査によると、通信制高校への入学時の期待が「高校卒業資格の取得」や「自分のペースで学習ができる」ことをあげ、不登校経験者なども通信制高校での生活を通じて自己肯定感を取り戻していることが報告されている⁽⁹⁾。以上のように、今日の高校教育、とりわけ不登校経験のある生徒にとっては、通信制高校が多様な学びの確保と生徒の自立支援のためには欠かせない存在となっていることがみてとれるのである。

そこで本稿では、高校において不登校となり、高校中途退学を回避するために通信制高校に転入した生徒へのインタビュー調査を基に、不登校生徒の自立支援として通信制高校が持つ意義と役割について考察してみたい。

2. 高等学校の不登校問題が抱える課題

はじめに高校生が不登校になる要因についてみてみたい。表1をみると、学校現場では「いじめを除く友人関係をめぐる問題」が29.8%と最も高く、「いじめ」の1.1%「教職員との関係をめぐる問題」の2.1%と合わせると、人間関係を理由とする内容が3割強となっている。一方で、「学業の不振」25.8%、「進路にかかる不安」12.1%、「入学、転編入学、進級時の不適応」17.4%と、学業や進路、進級など自身の学力や進路に関する内容を理由とする割合が6割弱となった。これらは不登校問題が人間関係の問題にとどまらず進路の問題であることを示しているといえる。また、内閣府（2010）によると、ひきこもりになった年齢は15歳～19歳が25.4%と最も多く、不登校になったり、職場や大学になじめなかったりすることがきっかけとなるなど、進学や就職といった新たな環境への適応が難しいことが理由となっていることが

表1 不登校になったきっかけ

区分	項目	合計	
		人数	構成比(%)
学校に係る状況	いじめ	179	1.1%
	いじめを除く友人関係をめぐる問題	4,820	29.8%
	教職員との関係をめぐる問題	345	2.1%
	学業の不振	4,180	25.8%
	進路にかかる不安	1,958	12.1%
	クラブ活動、部活動等への不適応	794	4.9%
	学校のきまり等をめぐる問題	1,099	6.8%
	入学、転編入学、進級時の不適応	2,815	17.4%
		16,190	100.0%
家庭に係る状況	家庭の生活環境の急激な変化	1,592	29.0%
	親子関係をめぐる問題	2,638	48.1%
	家庭内の不和	1,252	22.8%
		5,482	100.0%
本人に係る状況	病気による欠席	4,366	10.3%
	あそび・非行	6,821	16.1%
	無気力	16,881	39.8%
	不安など情緒的混乱	9,174	21.6%
	意図的な拒否	2,816	6.6%
	上記「病気による欠席」から「意図的な拒否」までのいずれにも該当しない、本人に関わる問題	2,360	5.6%
		42,418	100.0%
その他		1,187	
不明		1,537	

(注1) 複数回答可

(注2) 構成比については、原文は国公私立ごとに示していたが、ここではそれぞれの区分における構成比とした

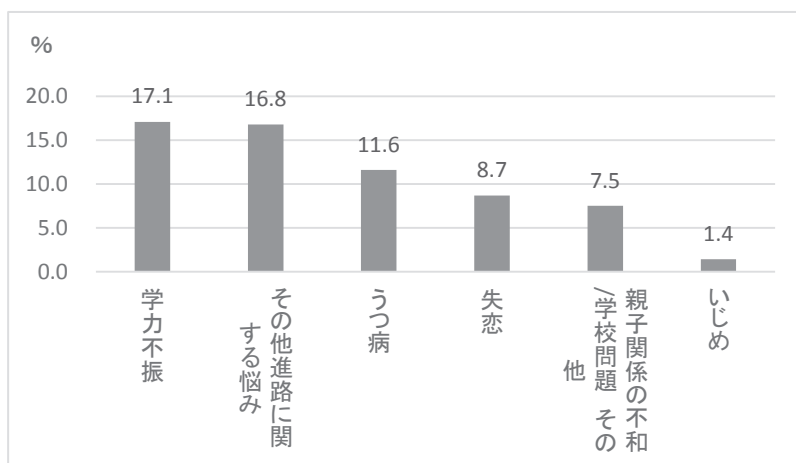
(出典)文部科学省「平成25年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」

明らかとなっている⁽¹⁰⁾。つまり、義務教育段階における不登校支援の手厚さに比べ、高校入学後に不登校となった生徒への支援は十分とはいえない状況にあるのは前節でも述べたが、不登校解決を進路の問題と捉えたとき、高校段階での不登校問題は、その後のキャリア形成に大きな影響を与えてしまうことがうかがえるのである。

次に、高校生の自殺の原因、動機についてみてみたい。内閣府の「平成27年版自殺対策白書(概要)」によると(図1、2参照)、男子では、「学力不振」が17.1%で最も多く、次いで「その他

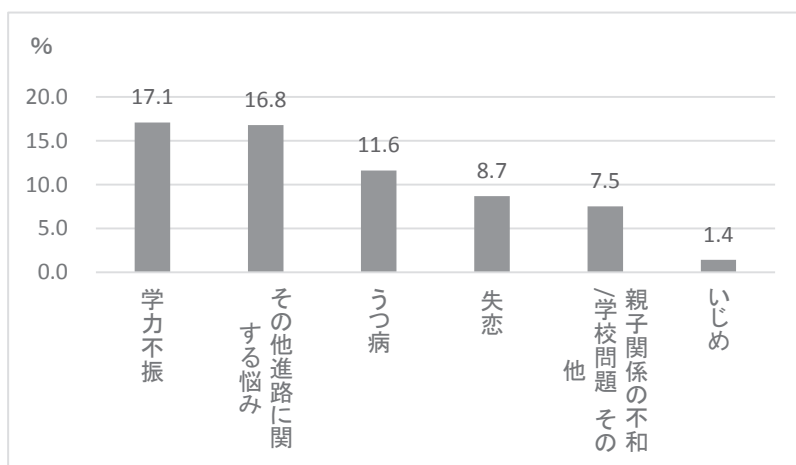
進路に関する悩み」の16.8%となり、学業や進路に関する悩みが上位であった。これに対して女子は、「うつ病」が21.8%と最も多く、次いで、「その他進路に関する悩み」が12.0%となっている。これをみると、女子は、うつ病や精神疾患などの精神的に不安定になることが重大な問題を生じさせる要因になっており、男子が女子に比べて、学業や進路について深刻に捉える傾向があることがみてとれる。このように、高校生にとっては、進路に関する悩みが大きな問題であるといえよう。

図1 高校生の自殺の原因・動機（男子）



（出典）内閣府「平成27年版自殺対策白書（概要）」より作成

図2 高校生の自殺の原因・動機（女子）



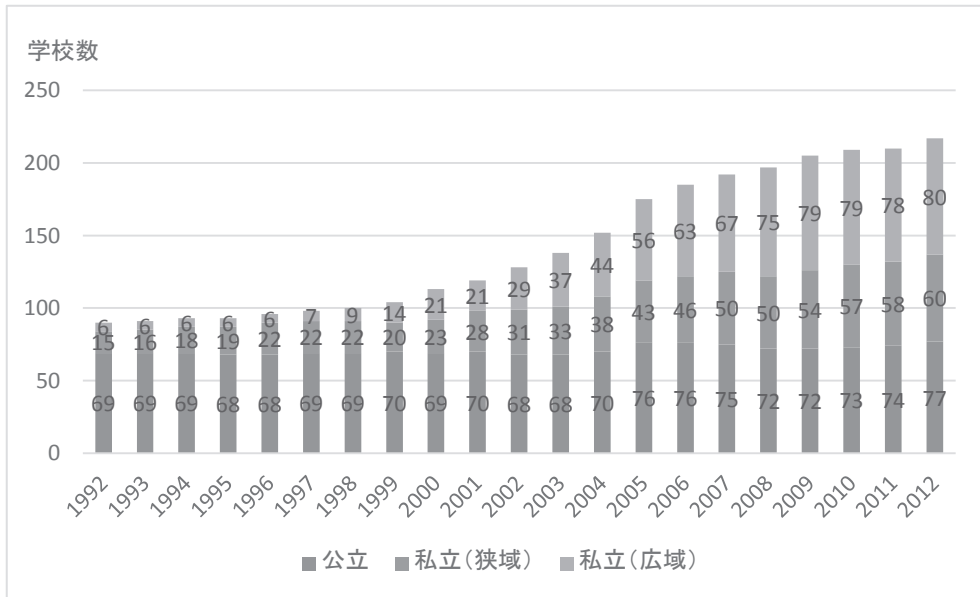
（出典）内閣府「平成27年版自殺対策白書（概要）」より作成

以上のように高校生にとって学校不適應の問題は、すぐそこに迫る学校から社会への移行の問題であったり、その先の将来を考えたりと、社会的な自立に対する不安と直結する重要な問題であるといえる。こうした状況のなかで、近年、注目されているのが「通信制高校」である。次節では、通信制高校を取り巻く環境の変化を概観しながら現状と課題についてみてみたい。

3. 通信制高校の現状と課題

図3は、この20年間における通信制高校の学校数の推移を示したものである⁽¹¹⁾。1992年当時は、全体で90校、内訳は公立の通信制高校が69校と、私立の狭域15校、広域6校と比べて多い状況であった。しかし、2003年頃には、公立より私立の学校数が多くなり、2012年に

図3 通信制高校の学校数推移



(出典)学校基本調査より作成

は全体が217校と1992年と比べて約2.5倍、内訳も私立の広域が80校、狭域が60校、公立が77校と、私立の広域が最も多い状況となっている。そして、こうした通信制高校の増加を背景に、中学校時代に不登校となった生徒の高校や大学進学率が上昇している現状もある⁽¹²⁾。

また、近年、広域性の私立高校が増加傾向にあるが、文部科学省(2014)は、広域性通信制高校の設置事業による成果・課題について、体験学習や集中スクーリングなどを通じて不登校状態にあった生徒が自己実現を達成したり、生徒自らの仕事観を見直し、誇りと使命感を持って仕事に向き合うことができたりと一定の効果があることを認めている一方で、学校によって教育内容に偏りがあったり、サテライト施設やサポート校⁽¹³⁾の位置づけが不明なため統一的な指導ができない等の課題も指摘している⁽¹⁴⁾。渡辺敦司(2014)は、文部科学省が一部の広域通信制を問題視している点について、「あくまで高校と名乗る以上は、通常の高校と

同じような教育の「質の保証」を行うべきだと考えているから」だとしている。しかし一方で、質の保証が保たれることは当然だが「通常の学校では中退を余儀なくされ、就職も不利となるような若者の成長を促し、卒業に結び付けるためにはどのような態勢が必要なのかという視点も忘れてはならない」と述べている⁽¹⁵⁾。

そして、体験学習は特別活動の一環で行われることが多いが、特別活動は通信制高校においても必須の科目となっており、各校とも学校ホームページなどで履修方法について広報している⁽¹⁶⁾。また、通信制高校によっては、体験学習先として提携した専門学校のプログラムを活用するなど⁽¹⁷⁾、進路に関わる学習内容を強みとしている様子がうかがえる。しかし、上野昌弘(2009)は、通信制高校では、こうした進路的行事や校外活動における生徒指導の点で課題があると指摘する。上野は、特別活動としてのホームルーム活動が行事・活動に参加する生徒の多くは、学校生活全般において積極的で

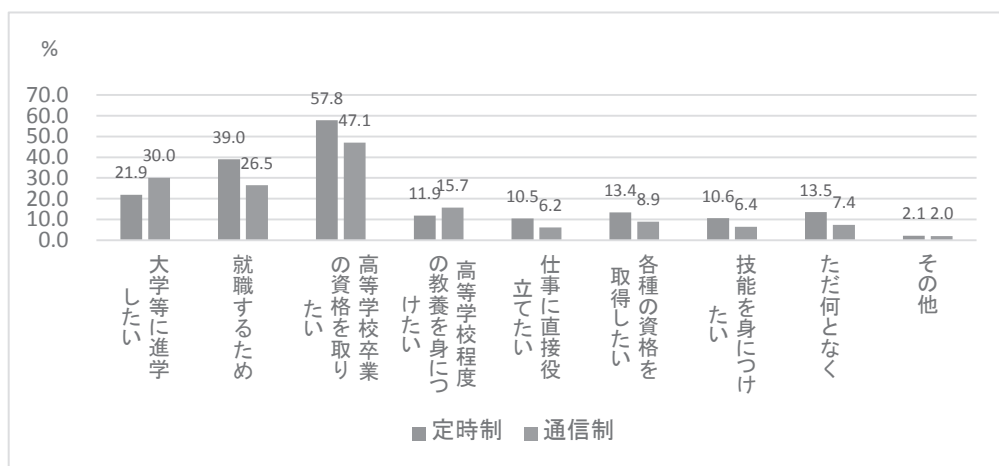
あり、自分の居場所を見出し、自己実現がなされやすい過程にあるが、一方で、参加しない生徒は、学校システムになじめず無目的に学校に来ているものが多く、こうした生徒が通信制課程ではかなりの割合で存在する点。そして、ホームルーム活動が集団として組織化されたり、協同して互いの問題に向き合うことがなく、個々の生徒が集散しているだけの状況にある点を問題視している⁽¹⁸⁾。通信制高校の学習においては一般の教科学習に注目しがちではあるが、高校生活というのは特別活動のように様々な行事や校外活動を通じて社会性や自立性を養うことも同様に重要となる。通信制高校においては、不登校経験者や対人コミュニケーションに不安を抱えた生徒が多いなかで、学校側が、生徒個々の状況をふまえながらの生徒指導が求められることになり、こうした上野の指摘は、その困難さを端的にあらわす興味深い指摘であるといえる。

このように、通信制高校のニーズが広がり受け入れ先の学校も増加しているなかでは、量的な拡大は図られているものの、教育内容の統一

や質保証のためのシステムづくりがおいついていない状況がうかがえる。すなわち、それほどまでに、学びのニーズが多様化しており、そうしたニーズに応えるための方策を手探り状態で整備しているのが現状であるといえよう。

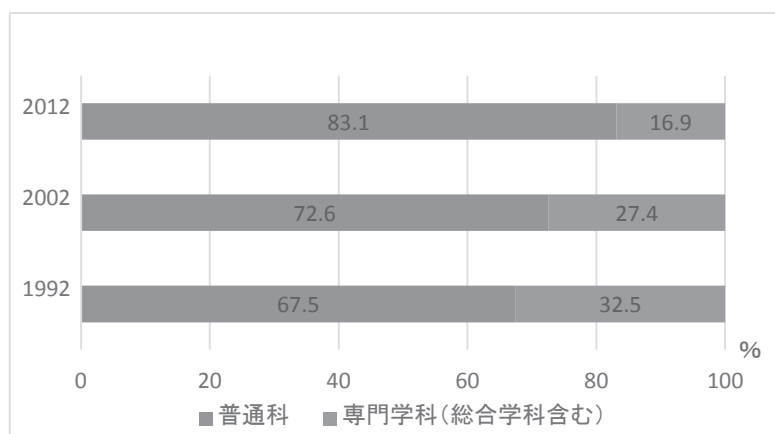
次に、定時制高校、通信制高校、それぞれに在学している生徒の学習の目的についてみてみたい(図4参照)。項目別でみると、「高等学校卒業の資格を取りたい」が最も高く、なかでも定時制57.8%が通信制47.1%より高い結果となった。これをみると、まずは高卒資格という学歴取得が強い学習動機になっていることがわかる。続いて、定時制では「就職するため」39.0%「各種の資格を取得したい」13.4%、「技能を身につけたい」10.6%、「仕事に直接役立てたい」10.5%と、これら就職や技能に関する項目すべてで通信制より高い数値を示している。一方で通信制をみると「大学に進学したい」30.0%、「高等学校程度の教養を身につけたい」15.7%といった進学や学びに関する項目が定時制より高い結果となっている。ここから、定時制生徒が仕事や技能を重視しているのに対して

図4 高等学校で学習している目的



(出典)公益財団法人全国高等学校定時制通信制教育振興会「平成 23 年度文部科学省委託事業『高等学校定時制課程・通信制課程の在り方に関する調査研究』」より作成

図5 学科種別（通信課程）



（出典）学校基本調査より作成

通信制生徒は、大学進学に必要な知識や教養といった要素を学習の目的とする傾向があることがみてとれるのである。この結果は、図5をみてもわかるように、この20年間、通信制において専門学科よりも普通科の割合が増えている状況が影響していることが考えられる。先の通信制高校数の推移で示したように、1992年から2012年にかけて全体で2.5倍の増加がみられたが、学科種別としては上級学校への進学機会を狭めることが少ない普通科を中心に拡大してきているのである。つまり、通信制生徒は、環境を変えることによって学習意欲を保ち、大学進学を志望するなど、全日制の生徒と同様な進路選択が可能となっているのである。

以上のように、通信制高校は、不登校や高校中退経験者にとって新たな学びの場として重要な機能を果たしているのがみてとれる。次節では、不登校を経験し、その後、通信制高校への転入、大学進学を果たした生徒へのインタビュー調査を通して、不登校生徒の自立支援に通信制高校の学びがどのように影響してきたのかについて検討を進めたい。

4. 通信制高校が不登校経験者の自立支援に与える影響

（1）インタビュー調査の結果

調査の概要

対象：A（大学1年生19歳）

Aは中学校卒業後、公立高校（専門学科）へ進学。しかし、友人関係に問題を抱え、2学年進級時に地元通信制高校に転入した。本人の認識としては、友人関係の問題は、いじめではなく、学習や進路の考え方や価値観の違いに対するストレスであったとしている。Aは1年次の後半数カ月はほとんど学校に行けない状況で、不登校状態であったと自覚している。家族構成は、両親と弟が1人の4人家族で、家庭の経済状況は普通と認識。大学に進学することについてはA自身の意思で決め、家族も進学に理解を示している。

方法：インタビュー調査（半構造化面接法：面接時間は30分）

実施日は、2015年3月21日

インタビュー調査結果については、フィールドノートへの記述から引用したものである。そして、実施にあたっては、個人が特定されることはないことや、調査の途中でも本人の自由意思で取りやめることが可能なことを伝え、論文への記載についても調査協力者本人の了承を得たうえで実施した。

結果は以下のとおりである（下線部は筆者による）

Q：最初の高校ではどのような生活でしたか？

A：難しかったです。なんか、全然、自分のいる場所がなかったなあって思います。とくに友達関係は、合わなかった。

Q：いじめられていたのですか？

A：そんなんは全然なかったです。勉強とか進路のこととか、やっぱ、考え方とかが合わなかったって感じですかね①。結局、最後の方は、学校に行く気になれなかったっていうか・・・

A：それと、僕は県内では難しいといわれる中学校受験に合格したんですが、事情があってそこには入学しなかったんです。それが悔しくて……。勉強は嫌いじゃないんですが、結局、高校もあまり行きたくないところを選んでしまったって感じです。高校を中退して働くことも考えたんですが、将来のことを考えると大学には行った方がよいと思って、通信に移りました②。

Aの不登校理由についてみると、友人関係が主たるものであるが、本人の認識としては「いじめ」といったことではなく、学習や将来の進路に対する考え方が合わなかったことによるものであったと振り返っている（下線部①）。また、中学受験の経験があるなど学習に対する意欲はあったものの、事情により合格した中学校への

進学が叶わなかったことで、学習意欲が減退したとのことだった。そのため、高校受験については自身の志望する普通科高校ではなく、中学の先生から専門学科を薦められ進学することとなった。また、一度は中退し仕事をすることも考えたが、やはり、将来、少しでも安定した仕事に就くためにも大学に進学したいと考え、通信制高校に転入を決意したのである（下線部②）。

Q：通信制高校へ転入してみてどうでしたか？

A：月に1回か2回ぐらいに学校に行くだけでしたから、好きなペースで勉強ができるのがよかったです③。もともと勉強はきらいじゃなかったですからね。

Q：勉強は好きなんだね

A：はい

Q：通信制高校での生活はどうでしたか？

A：同じような経験をしてきた人や、似たような考え方の人たちが多かったので、楽でした。みんな、そのあたりはお互い気にしないような雰囲気がありました④。あと、それぞれ目的意識とかもしっかりもっていたのも良かったです。前の学校は、将来のことについて話をする人はあまりいませんでした。それも自分と合わないところでした。通信制では自分の将来とか決めていた子は進路の意識が高く、先に、その専門学校とかで実習とか体験してたりして⑤、充実している感じでした。

Q：何についての実習ですか？

A：美容師とか、調理師とかが多かったです。あと、仕事をしながら高卒の資格を取りに来ている人もいたし、みんな自分のことをちゃんと考えていた人が多かったですよ⑥。

Aは不登校後、通信制高校へ転入することとなったが、通信制高校のメリットを自分のペースで学習することをあげている（下線部③）。

また、通信制高校の生徒の多くが、自分の同じような経験をしていることがわかり、お互い気を使わない雰囲気ができていることが居心地の良さを感じる要因となっていたようである（下線部④）。また、体験学習についての意識が高いことにも触れており（下線部⑤）、こうした取り組みを通じて周囲が、将来の仕事について明確に考えている者が多く、それぞれが、その目的に向かって、主体的かつ具体的な取り組みをしている状況にも居心地の良さを感じていた（下線部⑥）。

Q：通信制高校で良さを教えてください

A：自分としては、通信での勉強の仕方が大学での勉強の仕方に近いことがよかったのだと思います。必ず勉強しなければならない科目もありますが、自分の興味があることを選べるのが良かったです。そして、みんな勉強する内容がバラバラなので、教科によって教室にいる人たちもいつも違う人たちでした。だから、あまりクラスで固まるとか、そんな雰囲気がなかったのも良かったですね⑦。大学も同じような勉強の仕方だから、大学での勉強もあまり不安がなかったですし、実際、今も大丈夫です⑧。

Q：大学の勉強の仕方は高校の先生に教えてもらったのですか？

A：いえ、自分で調べました。先輩とかにも聞きましたし。他のみんなも、専門学校とかに自分で連絡してとか、行ってとかしていました。自分のことは自分でって思っていました⑨。

Q：通信制高校に行って良かったですか？

A：良かったと思います。……んー、良かったと思いますけどね。自分は全然後悔していません。でも、やっぱこれからの自分次第なんじゃないですか⑩。

Q：ありがとうございました。これからも頑張っ

てくださいね。

A：ありがとうございました。

通信制の良さについて、Aは「大学と同じ学習の仕方」という点をあげている。その理由に、自分の好きな科目を選べる点や、科目ごとで教室内にいる学習者が異なることも良い点であると述べており（下線部⑦）、言い換えると、前籍校では通常のクラス単位のように学習者が固定した環境のなかに、常に居続けなければならないことに対して不安を感じていたともいえる。また、本人も、大学での学習環境に近い環境にいたことで、スムーズに大学での学びに慣れたことも良さのひとつにあげている（下線部⑧）。そして、こうした進路に関する情報を本人も周囲も、主体的に行動しながら集めていたことを強調しているように、自立した考えや行動が醸成されたことに対する自己評価が高かった。最後に、通信制に進学したことに対する評価も、結局は、今後の自分次第、というようにあくまでも自分の問題として捉えていた。（下線部⑨、⑩）

（2）考察

本調査の結果から次の3点が明らかとなった。①高校を中退の理由が学習からの逃避ではなく、不本意な高校進学をリセットする意味を含めて、新たな学びの環境を得るために通信制高校に転学することに意義を見出していた。②その理由には、通信制高校の学びが「自分のペースで学習できること」に魅力を感じていることや、自身だけでなく周囲も学習や体験学習、進路相談に関して、あくまで主体的に行動する文化があることを強調している点が指摘できる。③そして、学校での友人関係の面では、通信制高校入学の動機を、お互い理解しあっている点があり、常にクラス単位で行動しないことが、周囲と居心地の良い距離感を保てる要因である

ことや、このようなシステムがあることによって大学での学習への適応が容易となる可能性がある。

以上をふまえて、考察を進めたい。

今回の調査において強調されていたのが、自由な学びと、主体的な行動、そして選択の結果は自己責任であるという意識をもっていたことである。武田鉄郎・西牧謙吾(2009)は、通信制高校の意義について、学習者自身のペースで学習活動に取り組めることや、科目履修に関して自己決定の自由があることをあげている。続けて、人間関係づくりに対して絶えず緊張感を持っている子どもたちに「働きかけない」という教育支援システムをとることによって学習しやすい環境がつけられている点をあげている⁽¹⁹⁾。つまり、通信制高校には、不登校経験者が新たな学びの環境として適応しやすい仕組みがあることがみてとれる。とりわけ、調査対象となったAのように、一定の学力水準を擁しているにもかかわらず、何らかの事由で不本意な高校入学を強いられた際に、それをリセットする役割を通信制高校が担う面があることが、本稿の調査によって確認できたのである。

また、Aは大学進学を志望し、それを実現していた。この点について内田康弘(2013)は、通信制高校の生徒の大学進学行動における前籍校の影響について、前籍校が、進路多様校である場合、その生徒の高校中退理由は前籍校への不本意入学及び進学トラックに対する上昇志向によるものであることを明らかにしている⁽²⁰⁾。Aについても、前籍校が進路多様校であり、その高校に在籍しているときには、将来の進路について日常的に自覚をしながら過ごしていたAからみて、進路に対する意識が希薄な周囲とのギャップも高校中退の理由のひとつにあげていた。何より、中学校受験を経験してきた自身に対しては一定の自己評価をしており、その自分の考えを進路多様校の学校文化に適応させるよ

りも、あくまで自分に合った場所を探すため、通信制高校への転入を選択したのである。つまり、Aにとって通信制高校への転入は、大学進学への道筋を明確にすることができたきっかけであり、実際に大学進学を実現した今、将来の自立に向かって進むことができた点で、良い選択であったと考えているのである。

そして、さらに注目したことは、通信制高校の学習スタイルが、大学での学習方法と似ていることが、大学進学への不安を和らげている点である。このような不登校経験者の大学教育への適応の問題については、興津真理子・水野邦夫ら(2006)が、不登校経験者は、未経験者に比べて自身を「慎重」「重々しい」「自信のない」と捉えており、対人場面において慎重な行動をとり、気楽な人づき合いが難しいことを明らかにし、大学生活の中で人間関係のつながりの重要性を実感させることが大切であると主張している⁽²¹⁾。本調査においても、通信制高校の良さとして、必要以上に人間関係づくりを必要としないことが示されており、不登校経験者の対人関係づくりの難しさをあらためて認識することとなった。しかし、学びの観点からAの現況をみると、大学の学習にスムーズに適応していることがうかがえるのである。すなわち、たとえば不登校経験者のように対人関係に不安を抱えるケースが多いと考えられる生徒たちであっても、高校とは違い、コミュニティに対して必要以上のかかわりを求められない大学での学習については、適応しやすい面があるといえるのである。つまり、大学教育の現場における不登校経験者の「適応」問題の捉え方については、「学習」と「対人関係」を切り分けるなどのきめ細かな分析と対応が求められることが示唆されたのである。

以上、本節では、通信制高校から大学進学を果たした者へのインタビュー調査を基に検討を進めてきた。不登校経験者にとって通信制高校

への転入が自立に向かうきっかけになっていることや、通信制高校の個別的な学びのスタイルが大学教育に適応することの不安を和らげることにつながっている点も確認できた。しかし当然ながら、大学は学習だけでなく、多くの人間と触れ合いながら関係を築く場であり、そのなかで対人コミュニケーション力を高めることも考えなければならない。この点は、興津・水野らが指摘しているように、人間関係のつながりの重要性を実感させる取り組みをするなど、様々な対応が必要であることは言うまでもない。

5. おわりに－本稿の成果と今後の課題－

学校教育現場において不登校問題が大きな課題であるなかで、この20年間、通信制高校は、普通科を中心に増加している現状がある。これは、文部科学省が示しているように、新たな学びのスタイルとして通信制高校の仕組みが注目されていることをあらわしているといえる。本稿においても、通信制高校には、自分のペースで学習を進めることができたり、体験学習を通して職業観を養うことができたりするなど、主体的に進路決定をすることができる仕組みがある点に意義があることを指摘した。

そして、本調査の分析、検討の結果から、通信制高校の学習スタイルやクラス単位での学習スタイルでないことによって、日常的に固定化したグループに属さなくてもよいといった独特の学校文化が、高校不登校経験者の居心地の良い「場所」を生み出す要因となっており、かれらの自立支援の側面からみて、通信制高校への転入が有効であることが確認できた点は成果のひとつであるといえる。さらに、通信制高校の学習スタイルが大学教育への適応の面で一定の効果があるという仮説が成り立つとの見方ができることや、不登校経験者の大学への適応の問

題については「学びの適応」と「対人関係の適応」といったようなきめ細かな捉え方が必要であることが示されたことは、今回の調査があくまで1名の事例をもとにした結果であるということをお案しつつも、今後の不登校経験者の大学進学行動に関する研究を進めるうえで意義がある結果といえる。引き続き、これらの点をふまえた量的調査を実施し検証をおこなっていきたい。

最後に、ここでは、大学進学を志望するような学習への取り組みを肯定的に捉えている生徒という限定的なものであることは付言しておくなければならない。斎藤剛史（2011）は、高校中退者のうち約3割が学びの場に戻ってきており、通信制高校が占める割合が49.7%と多くなっているものの、その多くが卒業後にフリーターとなっていることを指摘し、「進路に迷った10代の子どもたちが、円滑に職業生活に移行してキャリア形成していけるような支援や、中退してもやり直しができるような高校教育の改革が必要」と論じている⁽²²⁾。このような指摘をみれば、不登校経験者や高校中退者にとって通信制高校が学びの場にはなっているものの、多くが不安定雇用となっている事実は、かれらの経済的自立を促進させる難しさを示しているといわざるを得ない。また、事例Aの在籍していた学校は、行事や校外学習のような特別活動に積極的に取り組むタイプの生徒が多い様子であることがうかがえる。前述の上野が指摘したように通信制高校全般からみると、こうした活動に対して意欲的に取り組めない生徒が多い状況もあり、今後はそうした生徒への注目も必要となる。このような課題の解決に向けて調査、分析を進めながら、さらに実態把握に努めていくこととする。

【注と引用文献】

- (1) 朝日新聞は、2015年度の学校基本調査(速報)をうけて、2014年度中の不登校の小学生が全児童に占める割合が0.39%と過去最高であったことや、不登校の小学生と中学生が計12万2655人となり、いずれも2年連続で増加したことを報じている。<http://www.asahi.com/articles/ASH8463LWH84UTIL04F.html> : 2015年8月25日アクセス
- (2) 文部科学省『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査－用語の解説』http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/shidou/yougo/1267642.htm : 2015年4月21日アクセス
- (3) 占部真一「暴力行為、いじめ、不登校などと生徒指導」田中智志・橋本美保『新・教職課程シリーズ 生徒指導・進路指導』2014 pp.189-140
- (4) 文部科学省『平成25年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」』2014 p.72
- (5) 斎藤剛史「高校の「不登校」、対策が急務」『Benesse教育情報サイト』2009 <http://benesse.jp/blog/20090924/p2.html> : 2015年7月13日アクセス
- (6) 文部科学省 前掲書 2014 p.85
- (7) 文部科学省『生徒指導提要』2010 p.190
- (8) 文部科学省『初等中等教育分科会高等学校教育部会の審議経過について～高校教育の質保証に向けた学習状況の評価等に関する考え方』2013 p.5
- (9) 学校設置会社連携「通信制高校の生徒・保護者アンケート調査〈報告書〉」2008 <http://jaemo.net/01press/081226.html> : 2015年9月5日アクセス
- (10) 内閣府「若者の意識に関する調査(ひきこもりに関する実態調査) 報告書」2010 http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/pdf_index.html : 2015年9月8日アクセス
- (11) 広域通信制は、当該高校の所在する都道府県以外に2以上の都道府県から生徒募集を行うのに対して、狭域通信制は、生徒募集の範囲が学校の所在する都道府県のほか1都道府県とされている(山梨大学「通信制高等学校の第三者評価制度構築に関する調査研究(最終報告書)」2011 pp.10-11)。
- (12) 産経新聞によると、「自分のペースで学ぶこと」ができる通信制高校が、不登校を経験した生徒の受け皿の役割を担っている現状があることを報じている。(産経ニュース<http://www.sankei.com/life/news/140728/lif1407280048-n1.html> : 2015年8月23日アクセス)
- (13) 内田康弘(2014)は、サポート校について次のように述べている。「サポート校とは私立通信制高校に在籍する生徒の高校卒業資格取得支援や進路支援を行う民間教育機関であり、非一条校である。その在校生徒には不登校・高校中退経験者が多く、サポート校には彼らの「居場所」としての機能が期待されている」(内田康弘「私立通信制高校サポート校生徒の大学進学行動に関する分析:「前籍校」に着目して」『日本教育社会学会第65回大会発表要旨集録』2013 pp.314-315)
- (14) 文部科学省「高等学校の広域通信制の課程に関する調査結果について」2014
- (15) 渡辺敦司「広域通信制高校、ニーズはあるが課題もー」『Benesse教育情報サイト』2014 <http://benesse.jp/blog/20140228/p4.html> : 2015年9月15日アクセス
- (16) 通信制高校における特別活動の実施については、次のような特例も認められている。「通信制の課程における教育課程の特例:特別活動については、ホームルーム活動を含めて、各々の生徒の卒業までに30単位時間以上指導するものとする。なお、特別の事情がある場合には、ホームルーム活動及び生徒会活動の内容の一部を行わないものとしてすることができる」(文部科学省「高等学校学習指導要領解説特別活動編」p.50)
- (17) たとえば学校法人高松中央高等学校(広域通信課程(単位制)) 参照<http://www.ta-chuo.ed.jp/tsuushin/special/> : 2015年10月1日アクセス
- (18) 上野昌之「通信制高校における生徒指導に関する考察」『早稲田大学大学院研究紀要 別冊 16号2』2009 p.29
- (19) 武田鉄郎・西牧謙吾・大崎博史・植木田潤「慢性疾患、心身症、情緒及び行動の障害を伴う不登校の経験のある子どもの教育支援に関するガイドブック」独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 2009 pp.74-77
- (20) 内田康弘 前掲書2013 pp.314-315
- (21) 興津真理子・水野邦夫・吉川栄子「不登校経験者の大学への適応について」『聖泉論叢14』2006 pp.73-83
- (22) 斎藤剛史「高校中退しても3割が再び学校へ

内閣府調査』『Benesse教育情報サイト』2011
<http://benesse.jp/blog/20110606/p1.html> :
2015年9月14日アクセス